

図書館だより



2018年(平成30年)
11月22日・木曜日

第12号 読書感想文号

北海道旭川永嶺高等学校
図書館

「羊と鋼の森」を読んで

秋葉彩乃 2年5組

森の匂いがした。これはこの本の冒頭にある一文だ。私はこの一文を読んだ時少シワクワクした。どんなストーリーなのだろうかといろいろ頭の中での想像が膨らみ、この本を読書感想文の題材とすることにした。何と言っても、主人公の外村が迷いながらも一人前の調律師になるために興奮している姿がとても印象に残った。ピアノの調律を通して人との関わりや主人公のひたむきなストーリーなのだろうかと姿を考えさせられることが多かった。

私はこの本を読むまでは、調律師の仕事は、ただ音程を合わせたりするだけの単純な内容だと思っていたけれど、そのようなイメージとは全く異なるものだった。調律には、正確とも言えるものがなく調律師の感覚が頼りである。そして、ピアノの弦を叩くハンマーに使われているフェルトの硬さでそのピアノの音色が決まることから、一度フェルトを削ってしまうともう元には戻らない。音色にもいろいろあって、お客さんの希望にも答えなければいけない。これを知ったときは、とても神経を使う仕事であることがわかったのと同時に、私も外村と同じ立場だったら不安でいっぱいだったと思うし、調律師としてどこを目指していったら良いのかと、不安になる外村の感情が文章から伝わってきた。

もう一つ、この本の特質として挙げなければならないのは、ピアノの音や音楽といった目には見えないものを、あたかも頭の中に美しい旋律が聴こえてきそうな文書に表現されているということだ。文章や文字を読んでいるだけなのに、頭のなかに音楽が流れてくるということに大変感動した。さらに、さりげない会話に出てくる名言も心に響く。主人公の外村の努力や熱意が力強く描かれているわけではないけれど、外村のひたむきさや地道な

努力の積み重ねをコツコツ続けていくことが冷静かつ魂のこもった表現で描かれていたことも心に残った。

この本を読み終えて私の心に強く残ったことは、どんなときでもひたむきでいるということだ。主人公の外村のように、好きなこと没頭することは、絶対とは言いきれないが若いときにしか味わうことができないだろう。そして、好きなことだからこそ失敗したときだ。

人は生きていくと自分と他人を比べてしまうことはよくあることだ。自分と他人を比べることでより成長できるタイプの人であれば逆にどんどんネガティブ思考になって良くなるはずのことも思い方向に流されていくタイプの人もあると思う。私は、人と比べられて人と比べてたりするのはあまり好きではないので、この二つのタイプだと自分は二つ目のタイプに当てはまる。そしてこのときの外村と自分を重ねると、共感できる部分と、共感を超えて尊敬する部分があった。外村の、悩んだ結果、最終的に自分なりに答えを見つけプラスに変えていく感じが、自分と少し重なった。そして、何より外村のすごいところは、先輩の調律師や全国で活躍している調律師に、自分の調律の欠点や、どうしたら調律が上手くなるのかなど、自分から進んでアドバイスをもらいにいこうとするところだ。外村の真面目や調律に対する熱意、向かわなければいけない。これを知ったときは、とても神経を使う仕事であることが分かったのと同時に、私も外村と同じ立場だったから不安でいっぱいだったと思うし、調律師としてどこを目指していけば良いのかと、不安になる外村の感情が文書から伝わってきた。

もう一つ私の中で印象に残っている場面があった。それは外村と葛藤しているところだ。外村はピアノの調律が好きで朽ちてなりた。しかし、才能ある先輩と自分を比べ自分の才能の無さに気づき自分の見失ってしまった。確かに自分も含め誰もが才能があればと願うようなことはあると思うし自分で自分に才能が無いと決めつけたり、でも才能が無いと認めたくなかったりと、矛盾する気持ちが複雑に入り混じることもあると思う。けれど、

「才能がない」と思ったしまうのは、一方で外村のピアノの調律の想いが強いからなのだろう。そんな外村を見ていると、彼のひたむきな姿に胸が打たれる部分があってダメージが大きいし、自分の未熟さに苦しむことも多いはずだ。だからこそ諦めずコツコツ自分の技術を磨き続けている姿がとても胸を打つのだ。そして、誰もが初めは自信がないのは当たり前だし、それに不安や迷いがあっても前に進むためには考え続けて、足を踏み出し続けることしかない。でもそれは誰にでもできることであると、主人公外村に励まされた。壁にぶつかっても立ち上がり続ける。そんな外村の姿がかっこよかったし、自信は経験から作られていくものと知ることができた。きっと、外村はひたむきで素直な性格だったから、自分との葛藤に勝つことができたのだと思った。

この本はこれからの自分にどんな困難があっても立ち向かう勇気を与えてくれた。

平成30年度北海道児童・生徒読書感想文コンクール応募作品に旭川市学校図書館協会から選ばれた優れた作品名と氏名をお知らせします。(このコンクールの応募作品には前号でお知らせした旭川市コンクール入賞作品も含まれています。)

水口未侑 2年1組
「この世界の片隅に」を読んで

平野紗菜 2年2組
「和菓子のアン」を読んで

高橋樹里亜 2年3組
「ルーシー変奏曲」を読んで

安田真優 2年6組
「君の臍臓をたべたい」を読んで

山形真優 2年7組
「誰にでもあること」を読んで